

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372701021		
法人名	社会福祉法人順和会		
事業所名	グループホーム陽なたぼっこ		
所在地	熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽4463番地		
自己評価作成日	平成29年10月28日	評価結果市町村受理日	平成30年1月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成29年11月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

緑豊かな自然に囲まれ雄大な阿蘇山の麓に陽なたぼっこはあります。各居室からの眺めも良く春には桜、秋には紅葉が楽しめます。地震後から人手不足は続いておりましたが、8月27日に長陽大橋が開通し通勤時間も大幅に短縮されました。新職員の入職を期待しています。当事業所は、介護支援専門員、看護師、介護福祉士、等の有資格者を数多く配置し、専門性を活かした支援に取組み、入居者の皆様に安心して生活して頂いております。又、特別養護老人ホーム、デイサービスを併設し連携がとれる体制になっています。近年の重度化に伴い栄養課と連携し、その時の状態にあった食事を速やかに提供しています。又、重度化に対処的確な対応ができるよう勉強会を重ねています。阿蘇立野病院、きずな歯科、悠心病院からの往診も受け、入居者の皆様はもちろん、御家族の皆様にも安心して頂けるネットワークを構築しています。2ヶ月に1回の広報紙と御家族への手紙、又2ヶ月に1回のご本人様のスナップ写真と御家族への手紙は、毎回好評です。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

昨年4月の熊本地震はホームに様々な余波を残し、寸断された道路を利用していた職員の通勤を困難にし、やむなく退職に至った例など職員減少を避けられず苦労の1年だったようである。そうした中、10月に本年度第1回の運営推進会議が開催されたことで改めて地域や行政との連携の重要性を痛感している。法人施設長は震災により更に人口減少に拍車がかかることに思いをさせ、村全体の問題として現状と課題を明確にし、行政と共に村の今後をどう考えていくか一石を投じている。その中で職員の入居者に対する不自由な思いや淋しい思いをさせないようにとする努力の成果が入居者の表情となり、片道50キロの通勤距離もいとわない職員の明るい働きぶりからも推察される。困難な局面を一步一步前進されることを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当法人の理念である「ぬくもりと安心の福祉」を基に5項目を掲げている。各職員については各自名札に携帯し、いつでも確認できるようにしている。玄関、リビングに貼りいつでも見られるようにしている。又、会議の最後に唱和している。外部へは、広報紙や運営推進会議を活用している。	昨年の大地震により、退職を余儀なくされた職員の分もと残された職員が、一致団結してケアにあたっている。理念である家庭的な暮らし・自分らしい暮らし・心地良い暮らし・笑顔あふれる暮らし・地域の人と触れ合える暮らしの『5つの暮らし』は、入居者の暮らし方の指針として、新年度の見直しにおいて現状のまま継続することとしている。	今後も地域へ向けた啓発と、新たに入職する職員へこれまでのホームの歩みを通じ、理念を共有されることを望みたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	老人会、民生委員、地域のボランティアの方、消防団等と連絡を取り合い地域の情報収集に努めている。又、ショッピング、病院帰りの買い物等、嗜好品の購入等も地域のお店を利用し、できる限り地域を活用するようにしている。	入居者が引き続き地域へ出られるよう、地元老人会への参加や、商店での日用品の買い物の機会を支援している。また、震災を機に更に地域消防団との連携の重要性を痛感しており、年末の夜警などにも職員が参加協力している。法人全体で小・中学校のワークキャンプなどの受け入れに尽力しており、子供たちとの交流は入居者にも楽しみの一つである。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	学生の実習や福祉体験等の機会を活用し、認知症に対しての知識や技術を伝えるようにしている。慰問や面会等の機会も大切に、支援についての質問にもわかる範囲で答えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	生活がある程度落ち着き、偶数月の開催を予定していたが、職員不足が続いており、10月の開催のみとなってしまう。役場の健康推進課の職員の参加あり、現状や取り組みをより詳しく報告でき、意見交換できた。今後のサービス向上につなげたい。	震災後の体制不足から運営推進会議の開催が厳しい状況下であり、10月が初回開催となり次回は3月を予定している。入居者・家族が参加する中、今回は行政(役場)からも担当者が加わり、ホームの“今”を発信することで「現状が良く分かった」と、参加の意義が語られている。同席出来なかった家族へも内容を報告し、共有を図っている。	職員は運営推進会議が開催できたことに安心と今後に期待をしており、次回の会議には行政担当者にホーム内を見てもらい、会議内容がより身近になるような工夫を望みたい。また、交流のある学校関係者などへ体験学習の前後に参加を打診されることも検討願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法人を通して事業所の現状を報告し、又、運営推進会議や訪問調査の際に直接伝えるようにしている。法人職員の役場へ出かける機会も多く関係は良好である。	10月に開催された運営推進会議には役場担当者が参加し、現状を把握したうえでホームを取り巻く地域や行政の在り方を再認識してもらう機会となっている。法人施設長は地域の支援に感謝すると共に、震災後の村の現状をデータ化し、行政に提案しながら共存の道を歩いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	勉強会を通し身体拘束への認識を深めている。身体だけではなく声掛け等幅広く含まれている事まで指導。御入居者の安全面を考え可否を会議で話し合い、御家族へも相談し対応。徘徊(離脱)への対策として1階フロア内ドアセンサー及び施錠を行っていたが、現在、センサーは残し施錠はしていない。	法人全体で拘束を行わないことを前提としてケアにあたっており、9月の研修では特に新人職員にもわかりやすい表現や内容にて進めている。1階玄関については、現在までの職員体制の面から施錠を余儀なくされていたが、現状を見極めながら、全家族に説明したうえで解除している。入居者の中には、センサーマットを使用中の方もおられ、家族への説明と経過報告が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会を実施し、虐待防止に努めている。職員間でのコミュニケーションを大切にし、心身ともに健全な状態で業務に就く事が出来るよう努めている。又、業務内容等を常に見直し各職員の負担を軽減する事も虐待防止へ繋がる事と考えている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会を実施し、制度についての理解を深めている。事例が発生した場合には速やかに対応できるよう法人等とも連携を取っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に契約書及び重要事項説明書等にて説明を行っている。改定の際には書面を送付し、又、電話での問い合わせについても対応する事で十分な理解、納得が得られるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置や担当制を活用し様々な意見を聞けるよう努めている。意見については、ケア会議や運営推進会議及び広報誌を活用し外部へも発信できるよう努めている。	入浴時の同性介助に対する要望や、麺や丼ものを増やしてほしいといった食事に対する意見等、入居者が自ら発せられる言葉を大切に受け止め支援に反映させている。家族には普段の面会時やケアカンファレンス前のアンケートにより、気づきや意見を収集しプランに繋いでいる。	入浴時の職員対応についてははっきりと同性介助を望む声があがっており、当人ばかりでなく全入居者への確認が必要と思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者に対し、意見の出しやすい職場環境作りを心掛けており、ケア会議や朝礼を通して法人全体、代表者へも発信できるよう努めている。また、ちぐはぐ会議にて各職員からの意見を集め検討課題を事前に話し合い、ケア会議がスムーズに進むよう努めている。	震災による職員不足を全員の力で少しずつ乗り切りつつあるホームは、一人ひとりの意見を慎重に受け止めている。3年前からスタートした「ちぐはぐ会議」とネーミングされた議論の席で、必要と思われる内容を月のケア会議に図りながら対応策を検討している。法人は職員の人材育成に力を入れており、各資格取得や処遇改善に繋がる支援を充実させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	法人及び代表者も積極的に支援を行っている。資格取得への支援、資格手当、休暇も含めた業務改善、処遇改善、夜勤や改定手当等積極的に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	勉強会を始め新人研修や技術向上の為、他部所での研修も行っており、日々の業務の中で適切に対応出来るよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会研修会に参加し、同業者との情報の共有、ネットワークの構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前面接や関係者からの情報収集に努め、安心して入居出来るよう配慮している。認知力により訴えが困難な方に対しては、表情や仕草等の細かい変化にも気を配るようにし、信頼関係を築き、出来る限りの不安軽減に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	要望や不安に対しての聞き取りを適切に行えるよう努めている。また、事業所としての理念や方針等を理解していただき、より良いサービスが出来るよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・御家族のニーズに対応できる様幅広い視野でサービス内容を提案し他の事業所との連携も図りながら対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の御入居者が取り組める事も職員全体で把握し、日々のサービスに繋げている。又、御入居者と職員が共同で行うことで信頼関係が深まり互いの事を知り合う良い機会となっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	急変時は勿論の事、日常生活の様子や健康状態等を記載した手紙を月に1回御家族へ送付している。急を要しない相談ごとなども添え、できる限り御家族と一緒に考えサービスを提供出来る様努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人が来荘された際には、それが他事業所であっても交流できるよう配慮し面会も勧めている。又、地域との繋がりも大切に老人会の参加や施設内行事へ地域の方々の参加の呼びかけ等行っている。それまでの生活を継続的に支援している。	入居者に馴染みである地域商店の活用や、老人会、法人デイサービスとの交流により、顔見知りの人々と出会う機会を持っている。この夏の花火大会には近くの震災仮設住宅の住民を招待し、馴染みの人々との再会も果たされている。ホームのわきあいあいとした雰囲気は面会に訪れる家族や知人にとっても居心地の良い場所となり、入居者との時間をゆっくり過ごされている。これまで培った特技や生活の知恵が畑作りや花植え、台所仕事にも活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや行事、家事活動を通して御入居者同士がより良い関係を構築出来るよう配慮。内容も個人で出来る事、協力し合える事を分けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院により契約が終了した場合にも、お見舞いや面会等も行い、本人や御家族との関係が維持出来る様努めている。又、契約終了後も関係機関とも連携を図り、御家族からの相談等にも対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	屋間の過ごし方や食事形態等、本人の希望や年齢・状態等を観察。御家族へも相談しながら対応している。食欲が低下した場合には、高カロリー食材等も取り入れ入居者の状態にあったケアを提供できるよう努めている。	職員は日々の入居者との関わりや、入居者同士の会話などから思いや暮らし方の希望を確認している。時には入居者の代弁者として家族への面会を依頼したり、表現困難入居者の気持ちにより近づけるよう、普段の行動や表情観察に力を入れている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や御家族は勿論の事、担当ケアマネジャーやソーシャルワーカー等できる限りの情報を収集。それまでの生活に添ったサービス提供に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活状況、心身状態等をケース記録や個人表に記載。特記事項等は申し送りノートを活用し、全職員で一人一人の状況把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネジャーと担当職員が共同でアセスメントし、本人・御家族のニーズに反映した介護計画原案を作成。ケア会議にて全職員と討議。御家族にも参加して頂き、現状に即した介護計画を作成している。	1,2階の壁を越え全ての職員が2ユニットどの入居者にも関わるホームでは、担当職員はもとより全職員から上がった声がプランに反映されている。入居間もない方へのプラン作成にあたりまずは入居前と変わらぬ精神の安定を図り、食事や会話、入浴や排泄など個々の好みや残存能力を見極めながら慌てずせかさず、徐々に慣れてもらう内容としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の状態の変化や、その人に合ったケアを実践し、ケース記録に記載。又、申し送りノートを活用し全職員が状況の把握・共有できる様努めている。担当職員は評価やプランの見直しにこれらを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	行政や医療および地域社会と連携する事によって、選択肢を増やし、本人や御家族のニーズに対応できるように努めている。また、緊急時には、医療連携体制も整える努力をする事で、多様なサービスが提供できるよう配慮している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	行政や他職種との連携、地域のボランティア団体や老人会等、幅広く地域資源を活用している。又、地元の方々の訪問や外出によって関係を密にし、今後も協力関係を継続していけるよう配慮している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約時に、協力医療機関等の説明を行い、同意を得た上で主治医の変更を実施している。御家族、本人の希望も尊重し専門医等の受診についても対応。状況に応じて、御家族にも送迎等を依頼し、緊急時等には職員および看護師にて対応。	入居時に協力医療機関について説明を行っており、緊急事対応やもともとかかりつけだった方もあり、協力医による定期受診が行われている。眼科や皮膚科など他科受診についてもホームで柔軟に対応しているが、距離を有する医療機関については家族に依頼している。昨年の熊本地震発生時から寸断していた協力医療機関への交通手段の橋が開通したことは、家族の安心や職員にとっても心強いものとなっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	御入居者の体調不良、特変時には担当看護師に報告後、指示を受け対応している。また、法人の看護師とも協働する事で、適切な受診等スムーズな対応が出来るよう、医療連携体制を整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は、定期的に面会を行っており、心身の状態把握に努めている。また、担当看護師等との情報交換や協力医療機関、関係者との信頼関係の構築にも努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時、御家族に事前指定書および、重度化指針を説明しており、いつでも確認できるよう個人ファイルにまとめています。内容については、主治医にも報告し、意向の変化もある為、都度聞き取りを行い、意向を確認している。また、勉強会を実施し、職員の理解を深め、協力機関、法人、事業所全体で支援できる体制を作っている。	重度化や終末期支援については、入居時に指針や事前指定書をもとにホームの取組を説明しながらその時点での家族の思いなどを確認している。家族は慣れ親しんだホームでギリギリまでの対応を望まれる方が殆どであり、急変時などはその都度意向を確認しながら思いに沿う対応に努めている。また、職員のメンタル面にも配慮した研修会を開催し、理解を深めるようにしている。終末期支援にあたる場合は、法人と共有であるが、会議室を改装し家族も一緒に支援できる部屋を設けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手当および対応等、看護職員からの指導、勉強会の実施によって実践力に繋がっている。また、御入居者の急変や事故発生時に対応出来るよう、事務所内に医療連携手順表を掲示している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人および陽なたぼっこにて、定期的に訓練を実施し、地域の消防団とも連携。活動参加および情報交換を行っている。また、女性職員だけでも避難誘導がスムーズにできるよう、具体的な方法を学び、訓練に取り入れている。	法人やホーム単独で火災訓練の他、昨年の熊本地震で地域やホームが受けた被害を教訓に活かした訓練が行われている。また、女性職員のみでの避難誘導など、職員が実際有事に対応できることを想定した訓練が行われている。備蓄については1階の倉庫で管理し職員へも周知されている。地域の消防団とは当初から連携が図られており、夜警をはじめ、顔を合わす機会を持ち感謝や引き続き協力を伝えている。	法人全体の訓練には消防署の参加協力も得られており、訓練後の総評や結果などホームとしても周知しておくことが必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	御入居者に対し、声かけおよび対応を行う際、目線を合わせる丁寧な言葉づかい等に配慮し、不快感を与えたり、個人のプライバシーや尊厳を損ねないよう努めている。また、勉強会を実施し認識を深めている。	入居者への声かけや目線での対応など、入居者の尊厳への配慮について所長は細かな点を日ごろから指導している。また、プライバシーに関する研修会も計画の中に組み入れ周知を図っている。呼称は苗字にさん付けとしているが、同姓の場合は混乱されぬよう、下の名でも対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	担当制を導入する事によって、本人の希望等を把握し、出来る限り思いに沿った対応ができるようにしている。仏前支援や、嗜好品の購入、髪染め、居室内の冷蔵庫の設置が挙げらる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れについて、大まかな日課はあるものの形にはめる事なく都度声かけ等を行い、本人のペースで生活ができるよう入浴やレク活動、行事の参加等を勧めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧や毛染め、散髪等一人一人の要望に応じられる様に努め、その人らしい身だしなみやお洒落が出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	お盆拭きや台拭き、下膳等できる事をしていただき、畑での野菜収穫も行なっている。また、誕生日には希望食を提供する他、正月には専用食器を使用している。	献立作成や主食の米飯の準備以外は法人栄養部・厨房の方で行っており、ホームが調理をする機会は殆どないが、おやつに芋をふかしたり季節の果物などを準備している。郷土料理である団子汁や季節によっては刺身の提供も行われ入居者に好評である。本年はハロウィンプレートが新たに加わるなど、イベント食も工夫されている。食形態もキザミやミキサー食などホームや厨房が連携しながら取り組んでいる。入居者も畑の野菜を収穫したり、下膳や台拭きなどできる事で食への関りを持っている。	食は本人の楽しみや家族にとっても関心の一つと思われる。毎日3食をホームで摂る入居者の代弁者として、今後も気づきや提案など厨房に伝えながら、入居者に楽しい食事支援の提供を願いたい。また、法人栄養士もホームの入居者の食事の様子を確認する機会を定期的に持たれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	主治医や管理栄養士の下個人に応じた食事や水分を提供しており、禁止食の代替食の提供も出来ている。また、咀嚼や嚥下状態を見ながら刻み食、ミキサー食にするなどの対応をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケア実施。歯ブラシの他にも歯間ブラシや舌ブラシ、スポンジ等個別に応じたの道具を使用。また、週に1度の訪問歯科診療を受ける事で口腔内の清潔に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄能力に応じて対応行い、排泄の意思表示が難しい方には排泄表を使ってパターンを掴むほか、表情や行動にも気を配っている。また、定期的に個々の排泄状況を確認し、パットの見直しやおむつ使用の検討を行っている。	個々の排泄パターンや能力を全職員で共有し、声かけや誘導、適切な排泄用品や組み合わせなどを検討し支援している。また、表情やしぐさなどから早めの支援により、失敗のないようにしている。夜間のみ使用されるポータブルトイレは、日ごろから洗浄を行っているが、週1回徹底した洗浄の日を設け清潔に管理することで、気持ちよい使用や臭気などない居室環境に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適切な食事と水分量を提供する他、体操を日課に取り入れ、参加を働きかける事で便秘対策の一環としている。また、チェック表を用い医師や看護師の指示の下、各種下剤を使用し対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には毎日入浴出来る体制を整えており、個々に応じて機械浴と一般浴を設置している。また、馴染みの人と入りたいとの希望もあり柔軟に対応している。	一般個浴と機械浴がそれぞれのユニットに設けられ、入居者の身体状況によって対応できるようにしている。毎日入浴の準備を行っており、湯温や馴染みの人と一緒に入りたいなど柔軟に応じながら週2～3回の支援が行われている。菖蒲や柚子・バラなど季節湯の支援も継続されている。職員は安全面にも配慮しながら、着替えの準備や洗身など個々のできる事は一緒にサポートしている。	今後も入浴が清潔保持の支援と共に楽しい時間となるよう、職員のアイディアや工夫を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の年齢や表情等に気を配り、意思表示の難しい方にも適宜休息を促すほか、日中のレクリエーション等の活動を取り入れる事で夜間の睡眠に繋げている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋ファイルを作成し、薬の内容がいつでも確認できるようにしている。また、準備から服薬に至るまで常に職員がチェックを行い誤薬防止に努めている。服薬後も体調に気を配り、異常が見られる場合には看護師に報告し対応行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事活動や裁縫、野菜の収穫、レクリエーション等一緒に行い支援する事で、個々に応じた役割や楽しみにつながっている。また、担当制を用いる事で嗜好品の購入等柔軟に対応出来ている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員の不足や入居者の状況の変化に伴い、ボランティアの協力なしでは外出が難しくなっているが、知人の送迎による老人会の参加は継続出来ており、また、御家族の協力により選挙の投票にも行かれる。	昨年の熊本地震後は職員体制の面や入居者の身体状況から以前のような外出支援は困難な面もあるが、ボランティアや家族の協力も得ながら取り組んでいる。知人の送迎による老人会への参加は継続されており、地域の方のご厚情が入居者の生活に活気をもたらしている。朝からホームのごみ捨てを手伝われる方、敷地内の散歩など個別支援で身近な外出や外気浴の機会を作っている。8月にはボランティアの協力も得、地域の物産館へ出かけ、名品のプリンを食べたり、猿の演芸を見る機会もあり、笑顔で会話が弾む時間となったようである。	法人敷地内は雄大な阿蘇を眺めながら散歩や散策が楽しめる他、裏庭は見事な紅葉が間近に眺められる。今後もホームの環境を活かした外出や外気浴の機会を継続いただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	御家族に承諾を得、個人で出来る方は自己管理としており、外出時や訪問ヤクルト販売時の購入をされている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時に職員の介助でかけており、先方を確認し本人と替わり間違い電話を防止。御家族の希望で制限ある方には注意して対応。電話は随時対応。手紙や年賀状など入居者と担当で作成し、写真を載せ元気な姿が確認出来るようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間に限らず職員が清掃し、清潔を保っている。また、行事写真等を掲示し、生花を飾るなど、季節を感じられるよう工夫している。年間を通して程よい明るさや空調の調整を行っている。	1階・2階と分かれたユニットであるが、一つ屋根の下のホームとして、職員は固定せず全体を把握することで、入居者に応じた環境整備に繋げている。ユニットで介護度も異なることから、リビングの椅子やテーブル、ソファの配置などその時々で検討を行っている。共有の玄関には特に季節の花やその日のコメントなどを記し、来訪者にとっても訪れやすい空間となるように努めている。また、外出や日頃の様子を写した写真は、直近の物を廊下に掲示することで、身近な思い出として家族にとっても楽しみとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング内にはソファ、廊下には長椅子があり、思い思いの場所で過ごされている。気の合った御入居者同士、居室を行き来し会話を楽しんでいる。談話室も準備しており、希望時には利用できるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に御家族と相談しながら今まで使い慣れたタンスや仏壇等、愛着がある物や精神的に落ち着く物を持ち込まれ、これまでの生活に近い環境作りをしている。また、写真や誕生色紙、家族からの手紙も飾られている。	居室の環境については家族と相談しながら進めており、入居時には使い慣れた物や安心できる小物などの持ち込みを依頼している。時計や帽子をはじめ、タンスの引き出しからシート代わりに敷かれていたセピア色の新聞紙が出てきたこともあったようで、長年大切に使用された品であることが窺える。仏壇や遺影、家族の写真は心の拠り所となり、写真を指しながら嬉しそうに説明くださる入居者の表情が印象的であった。	家族の面会時の写真は本人や次回訪れた家族にとっても嬉しいものと思われる。可能であれば、特に遠方や久しぶりの面会時には記念に残し掲示いただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入り口には個別の暖簾と表札を作成している。動線上の整理を行い、本人に適した物を使用するなど、安全に自立した生活が出来るように環境作りを心がけている。		